

壤有機炭素含有率はほとんど変化しなかった。

しかし、この場合にはもともと土壤有機炭素含有率が1%と非常に低い土壤で有機物残さの多い小麦を栽培し、また土壤中に多量に含まれるカルシウムと粘土によって有機物が保持されたため、有機物含有率が低いレベルながらも維持されたものと考えられる。

安定した有機物施用

本連載19回目でも触れたように現代の農業においては、耕うんによる土壤有機物の分解促進や土壤侵食による土壤の損失によって、土壤有機物の含有率を増加させることは容易なことではない。

土壤に加えた植物残さや堆肥の大部分は数年の内に分解されて失われてしまう。もちろん分解によって土壤中に養分が放出されるので肥沃度の維持増進という目的にはなっている。

しかし、土壤中の有機物含有率を増大させるためには、連載17回目で紹介したアマゾン川流域のテラプレタ土壤のように炭化させるなどして安定化した有機物を施用する必要があると思われる。

これらのことから、日本で4/1000イニシアチブの目標値を上回るレベルで土壤への有機物の投入を行なっても問題はなく、むしろ積極的に推進すべきであると考える。

の有機物を投入しないと、投入分は土壤中で毎年分解されてしまい、土壤有機炭素の増大には結びつかない。

フタバ印のタネ

感動と満足の種子

埼玉県久喜市野久喜1-1

野原種苗株式会社

電話 (0480) 21-0002(代)

FAX (0480) 23-5005

タネは1番・デンワは2番

誠意と確実の表徴



フタバ印

なお、本連載18回目でも触れたように、ローザムステッド農業試験場の長期試験においては、化学肥料のみで170年近く小麦を栽培しても、土